

國學院大學学術情報リポジトリ

ガストン・バシュラールにおける芸術の社会「貢献」：サルトルを媒介として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋爪, 恵子, Hashizume, Keiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000773

ガストン・バシュラルにおける 芸術の社会「貢献」 ——サルトルを媒介として——

橋爪恵子

本稿はフランスの思想家ガストン・バシュラルの思想を芸術の社会「貢献」という観点から論じることを目的とする。バシュラルは認識論および芸術論で独創的な議論を展開した思想家であるとみなされているが、芸術と社会のかかわりを論じる場合、ほとんど議論の俎上に上ることのない思想家といつてよいだろう。それどころかバシュラルの芸術論は、社会から隔絶した「幸福」を論じるものとして批判されることすらある。確かに同時代のサルトルなどの議論と比較すると、芸術の鑑賞者を「孤独」と位置付けるバシュラルの議論は、一見したところ社会との関連を拒絶しているように見える。しかしバシュラルの芸術論は、サルトルの主張するような意味での芸術の社会への貢献を重視していないとしても、実は異なる観点から芸術の社会「貢献」の可能性を論じている⁽¹⁾。このような観点から本稿ではバシュラルの芸術論における社会的「貢献」の問題を、同時代のサルトルと比較しつつ明らかにすることを目指す。

第一節 バシュラルにおける芸術と孤独

まずはバシュラルの思想の大きな枠組みについて簡単にとらえ、バシュラルの芸術論がなぜ社会と隔絶した議論であると思われるのかを確認しよう。すでに述べたように彼は詩学と科学哲学という二つの領域を考察した。この二つの関係はどのようになっているのだろうか。バシュラルは、詩学の最初の著作『火の精神分析』で次のように述べている。

「詩と科学の軸は始めから逆である。哲学がなしうることは、詩を科学と相補的にすることであり、それらを反対命題として上手く統一することである。従って、開放的な詩的精神と無口な科学的精神を対立させなければならず […]」
(PF⁽²⁾ 12)

引用文では科学、詩、哲学の三者が、対立する科学と詩を哲学が統一する、という図式によって示される。ここでいわれる「詩」とは、イメージを生み出す芸術の代表として理解できる⁽³⁾。このように科学と芸術は「対立」の構造に置かれ、これを統一するのが哲学である。そして時間論がバシュラールの唯一の形而上学であり、時間論での瞬間が科学に、持続が芸術に代表される詩的イメージに結び付けられることを考えるならば、この図式も納得できる。そのため芸術、とりわけ詩は次のような問題を論じるものとされる。

かなり以前に書いた本の中で、熱現象に関して、科学的客観化のかなり明確な軸を記述しようとしたことがある。そこで私が示したことは、幾何学と代数学が少しずつ抽象的な形式と原理をもたらし、実験が科学的な道筋へと方向付けられていく様相であった。今度私が探求しようとしているのは逆の軸——客観化の軸ではなく主観性の軸——であり […] (PF 14)

ここで「以前に書いた本」とは、1928年に書かれた文学博士の副論文『物理学の一問題の発展について』である。16年前の著作であるにもかかわらず言及されるのは、その主題が「熱現象」である点で、『火の精神分析』と関連するからである。この著作の主題が、科学的認識という「客観化」の試みであるとするならば、『火の精神分析』で主題となるイメージは「主観性」の側に属する⁽⁴⁾。すなわち芸術にみられる詩的イメージは、科学と対立し、主観性を問題とする領域なのである。

対立という構造に置かれることによって、芸術と科学は相反する性質を強調される。中でも本稿の主題にとって注目すべきは、芸術は孤独なものであるという議論である。

それゆえ良い蠟燭の思い出の中にこそ、我々は孤独の夢を再発見するに違いない。焰は一人であり、生まれながらに一人であり、一人のままであることを望んでいる (FC⁽⁵⁾ 36)

簡単に、ここで引用した『蠟燭の焰』の出版の経緯を確認しよう。バシュラールは本来、火そのものの詩的イメージを論じる書物『火の詩学』を構想していた。しかし彼の健康状態もあり、一部が『蠟燭の焰』という形で出版される。したがってここでの蠟燭についての議論は、火という芸術における重要な詩的イメージの一つの特質として議論されている。引用部において、蠟燭の焰が炉端の火などと異なる点は、我々に孤独を感じさせるところだ、とバシュラールは指摘する。炉端の火は大きく、その周りで展開される家族の営みを思わせる。しかし蠟の焰は小さく、それと対峙する人間の孤独を浮かび上がらせる。そのような孤独こそ、

芸術的イメージを育む夢想家とろうそくの炎の共通点であり、夢想が蠟燭の炎に惹かれる一因となる。すなわち「孤立した焰は、夢想家と焰を一体化する孤独の証」(FC 13)なのである。

この孤独という性質が蠟燭の炎に関する詩的イメージのみでなく、芸術的イメージ全体の性質であることは、芸術が相反するとされる科学においては、逆に他者との相互理解が強調されることから確かめられるだろう。

注意深く、情熱的な興味を持って現代物理学の活動を眺めてみると、そこには例外的なまでに正確な哲学的対話が沸き起こっているのが見て取れる。その対話は精密な器具を操る実験家と、経験を顕密な形で報告しようという野心を持つ数学者との間で交わされる。(中略) 哲学学会では多くの哲学者が議論を戦わせ、物理学会では実験化や理論家が情報を交換する (RA⁽⁶⁾ 1)

引用は、科学についての著作『適応合理論』の冒頭である。ここでバシュラールは科学の特質を哲学と比較して論じている。哲学者は同じ言葉を使いながら、実は別の話をしており、だからこそ議論になってしまう。これに対して科学者は同じ話をしており、有益な情報を交換することが出来る。このように実験と理論という異なった方法を使いながらも、互いに理解し協力できるのが科学者の集団の特徴だとバシュラールは考えていた。そして、この関係は理論家と実験家の間にとどまらない。科学理論においては、それが正しいものであるならばどんなに独創的なものであろうとも結果的には多くの人に受け入れられるものになっていく。さらにそこで共有された理論を土台に新しい理論が生まれ、それが正しい物であれば、また受け入れられる。このプロセスを経て生み出された他者との相互理解と理論の共有が科学の基本であり、個人的なものになりがちな芸術的イメージとの違いであるとバシュラールは考えていた。

以上のように科学と芸術は、相反するものとして議論され、芸術は孤独に、科学は多くの人間との相互理解のもとに成り立っている、とされる。この構図で論じられるバシュラールの詩学が、芸術について社会からの孤立を推奨すると結論付けられてもやむをえないだろう。また芸術論そのものの特質に加えて、実際にバシュラールの詩学では、ポーやホフマンなどの幻想的な文学が評価され、取り上げられる。すなわち現実離れた話を、一人孤独に鑑賞する夢想者が主題となる。その点でも、同時代のサルトルに代表されるような、社会参加を積極的に打ち出した芸術論と比較して、社会的孤立を推奨する議論と言われてもしかたないかもしれない。

しかし本稿冒頭で述べたようにバシュラールの芸術論には、サルトルとは別の形で芸術の社会への貢献が指摘されている。この点を確認するために次節では、サルトルの議論と比較しつつ、芸術の社会貢献について明らかにする。

第二節 言語芸術の社会貢献と小説の位置づけ

サルトルはバシュラールと同時代に活躍したというだけでなく、現象学に言及しつつ、文学について論じた点においてもバシュラールと多くの類似点を持った思想家である⁽⁷⁾。しかし芸術の社会「貢献」という主題でとらえるならば、両極端とも思える主張を行っている。アンガージュマンという言葉に象徴されるように、サルトルは芸術、とりわけ小説における社会的な役割を強調した。それは偶発的な主張ではなく、サルトルの芸術論の根幹にかかわる議論である。なぜならアンガージュマンの議論は、次に見るように小説（散文）と詩との区別そのものに基づいているからである。

ただし、次の区別をしなければいけない。それは記号の帝国である散文と、絵や彫刻や音楽の側にある詩である。（中略）事実、詩人は道具としての言葉と一挙に手を切って、最終的に詩的態度、すなわち言葉を道具としてではなく、ものとして考えることを選んだ。なぜなら記号には両義性があり、ガラスのように意のままに横切り、それを通して意味されたものを追求することもできるし、あるいは視線を記号の現実に移し、それを対象とみなすこともできるからである（Q⁽⁸⁾ 17-9）

サルトルは、言語を使用する芸術家を小説家と詩人に分け、詩人を画家や音楽家と同列に置く。その違いは、作品を一つの「もの（chose）」として提示するのか、別なものを意味するための「記号（signe）」として使用するか、という点である。サルトルは、あばら家を描く例を取り上げ、良い画家が描く場合には、外部にあるあばら家を指し示す記号ではなく、それ自体が「一軒の」あばら家として提示される、という⁽⁹⁾。もちろん、それ以上の意味を読み取ること（例えば、描かれた家をみじめさの象徴として読解すること）も可能だが、それは鑑賞者にゆだねられている。これと同様に良い詩人は言語を、何かを指し示す記号ではなく「もの」として提示する。詩人が時として奇妙な言葉の組み合わせ（例えば「バターの馬（cheval de beurre）」）を生み出すのは、それが意味するものではなく言葉そのものに着目させるためである。このように「言葉そのもの」に向かうことを目指す詩に対して、散文の言語は「記号」である、と彼は言う。それが目標とするのは「ガラス」のように自らは透明となり、外部の何かを指し示すことである⁽¹⁰⁾。もちろん、この区別はサルトルにとって散文が詩よりも劣ったジャンルであることを意味するものではない。散文の言葉は利用され、それを使って何かを成し遂げるためのものであり、その点において重要性を保持し続けるからである。

以上の主張において、小説の社会的貢献は、非常に重要な問題であることが分かるだろう。すなわち小説にとって言葉で何かを指し示すことが重要であり、その指し示した結果の一つが社会への貢献だからである。したがって社会に貢献するか否かは、副次的な価値ではなく、小説それ自体の意義を担うものとなる。

サルトルのこの議論と比較すると、バシュラルが対照的ともいえる議論を展開していることは、詩をどのように位置づけるか、という議論に既に現れている。第一節の引用で指摘したように、バシュラルは「詩」を芸術一般を代表するジャンルと見なし、そこに本質的な区別を設けない。それは、「詩学 (poetic)」に対する彼の次のような見方に基づいている。

夢想する人の存在は、彼が出現させるイメージによって形成される。イメージは私たちを無気力な状態から目覚まし、私たちの覚醒は一つのコギトとして表明される。さらに価値付加作用が生じるとき、積極的な夢想が、生産する夢想が現れる。その夢想は生み出すものがどんなに弱いものであれ、詩的夢想という名づけられる。夢想は、その産物のなか、またその生産者としても、詩的という語の語源的意味を確かに受け取るだろう (PR⁽¹¹⁾ 130-1)

「夢想する人」とは、イメージを作り出す人であり、そこには画家、詩人、小説家のみならず、何かを想像する人すべてを含む。バシュラルは「夢想する人」にこのような広い定義を設けながら、しかし夜に見る「夢」を見ている人とは区別する。それは「夢想する人」のみに、コギトすなわち主体の積極的な働きかけを認めるからである⁽¹²⁾。その結果、生み出されるイメージは、夜の夢のように自動的に生じるものではなく、我々自らが生産する創造的なものとなる。その意味で、すべての夢想が「詩学」の語源的意味、すなわち「制作術」としての名に値するとバシュラルは主張した。

このバシュラルの「夢想」の定義がサルトルの議論と最も対立するのは、イメージと知覚の差異についてである。バシュラルの「夢想する人」には、実際の事物を見てそこに自分のイメージを投影する人も含まれる。すなわち、目の前にはない家を思い出して夢想する人と、実際の家を見て夢想する人との間に根本的な違いはない⁽¹³⁾。したがってこの議論は以下の引用が示すような、サルトルが重視する知覚とイメージの区別をなくしてしまうことになる。

イメージにおいて対象は多様な総合的作用において捉えられるべきものとしてあらわれる。これにより、また対象の内容が感覚的不透明性をもつ幻影のようなものをとどめているため、すなわち本質や一般法則が問題となっているのではなく、非合理的性質が問題になっているため、それは観察の対象であるように思われる。(中略) だがその一方でイメージは何も教えず、決

して新たな印象をもたらさず、対象の一面をあらわにすることも決してない。
(中略) 知覚は私をだますこともあるが、イメージは違う (I⁽¹⁴⁾ 49-50)

イメージは概念と異なり、非合理的性質が示される点において知覚と類似している、とサルトルは言う。しかし夢の中のパルテノン神殿の柱を数えようとしても上手くいかないように、イメージが示すものは我々がすでに知っていることだけであり、その点で新しい情報を与えてくれる知覚とは異なる。以上のように指摘しつつサルトルは、イメージにおいて実在しないということこそが「本質的性質」(I 290) であると指摘する⁽¹⁵⁾。

そのため、サルトルにとってイメージは現実知覚とはっきり区別される。そして現実を見ずにイメージにふけることは「逃避⁽¹⁶⁾」と見なされ、「大部分の人にとっては何かの代わりをするに過ぎない」もの、「分裂病患者が望む」(I 189) ものとなる⁽¹⁷⁾。もちろんイメージのすべてが悪いわけではない。イメージのこの性質に対抗するものとして二つの道がある。すなわち絵画や詩のように作品そのものを代わりの効かない一つの「もの」として提示するか、散文のように「記号」として現実と関わることを目指すか、である。このようにサルトルにとって小説の社会的貢献は、不可欠の要素であった。他方でバシュラルにとって芸術が社会とかかわることは必須ではないことは、これまでの議論からも予想できるだろう。バシュラルにとっては詩も小説も、現実のものを知覚することと根本的に違いはない⁽¹⁸⁾。したがってイメージ特有の性質は存在せず⁽¹⁹⁾、サルトルの議論で指摘される、「記号」としての言語の働きは必ずしも必要とされない⁽²⁰⁾。これが、バシュラルの詩学においてポーやホフマンらの幻想的な描写の作家が多く取り上げられ、社会的改革を目指したいいわゆるプロレタリア文学にほとんど触れられない一因となる。

しかしバシュラルにおいて、イメージが現実と関わる要素が存在しないとは言えない。確かに彼は、芸術的イメージと通常の知覚の間に本質的差異を認めず、それ故に芸術独自の働きとしての社会貢献を見出さなかった。とはいえ、芸術をも含めたイメージが現実へと影響をもたらす場面がないわけではない。例えばバシュラルは次のような場면을挙げているからである。

夜遅く、モベール広場では自動車が吠え、トラックの轟音が都会に住む私の運命を呪わせる時、私は海の比喩を生きることで安らぎを得る。都会はざわめく海であることは周知の事実である。(中略) 怒り狂った空気は、いたるところでクラクションを鳴らしている。そして私は自分を慰めるために自分に言い聞かせる。みろ、お前の小舟は丈夫だ。石の船に乗っているお前は安全だ (PE⁽²¹⁾ 43)

夜中に騒音がうるさい時、イメージを膨らませることで騒音を和らげる事例をバシュラルは取り上げる。不快な車の音をより快適な状況、例えば自分が海にいとイメージすることで、騒音が快いものとさえ感じてくる⁽²²⁾。このようにバシュラルは、イメージを使った現実の改変の可能性を指摘した。そしてその結果、何らかの良い効果、例えば引用にあるような安らぎを得ることが出来るのであれば、それは芸術が単なる幻想にとどまらず、現実の社会に「貢献」していると言えないだろうか⁽²³⁾。

もちろん、サルトルの立場に立つならばこのようなイメージの効果を「貢献」として認めることはできないだろう。それは主に二つの理由による。第一に、どのようなイメージを投げかけようと夜の音は騒音であり、波の音ではない。自宅の周囲がうるさい場合にすべきことは、音量を下げるように現実世界に働きかけることであり、小説家であるならば他の人をそのような行動に駆り立てる小説を執筆すべきである。逆に現実世界の困難を解決しようともせず、イメージの力で誤魔化してしまうことは、まさにサルトルが指摘するイメージの「逃避」の働きであり、現実を悪い方向へと導いてしまうだろう⁽²⁴⁾。

これに対してバシュラルの立場に立つならば、以下のように再反論できる。彼にとって想像とは特別な行為ではなく、現実の知覚にもイメージが常に伴う。むしろ我々がイメージ抜きに現実に触れることはめったにない。したがって「本当の」現実に関心することは不可能であり、イメージを伴うからと言ってそれを「逃避」と位置付けるならば「逃避」でない知覚はほとんどない。我々の現実の知覚には、常に主体の働きかけが影響していないのであり、そのように考えるならばそもそも語り掛けるべき本当の「現実」は存在しないことになるだろう⁽²⁵⁾。

サルトルの立場からの第二の批判は次のような指摘である。バシュラルが指摘するイメージの働きは、イメージの何らかの効果であるとしても「社会」に対する貢献ではない。なぜならば我々の知覚が常にイメージを伴い、さらにイメージによって知覚を変化させることが可能であったとしても、それは個人の感覚の変化であって、他者をも含めた社会全体に恩恵を与えるものではない。したがって「社会」への貢献としては不十分である、というものである。

この二つの批判点、とりわけ第二の指摘はバシュラルのこれまでの議論に当てはまる。それではやはりバシュラルの議論は、社会からの「逃避」を推奨するものなのだろうか。実はバシュラルは別の形で、芸術の社会に対する貢献の可能性を示唆している。次節では、その点について考察しよう。

第三節 休息としての芸術

以上のようにバシュラルの芸術論は、サルトルと別な形で現実の改変を目指すものであったとはいえ、社会からの逃避として位置づけられても仕方のない側

面をも含んでいる。しかしバシュラルの芸術に関する議論は、サルトルと別の社会貢献の可能性について言及していた。この点を本節では考察していこう。

初めに取り上げるべきは、第一節でのべた科学と芸術が「対立」とするという関係についてである。確かに詩学を論じ始めた当初、バシュラルは芸術と科学と対立するものとしてとらえるが、実は晩年の議論では多少ニュアンスが変わっている。

私が落ち着いて仕事ができるようになったのは、私の執筆生活を一つは概念のもとにあり、もう一つはイメージの星の元にある、ほとんど独立した二つの分野にきちんと区切ってからのことであった (FPF 33⁽²⁶⁾)

この引用文では「概念の元にある分野」とは認識論のことであり、「イメージの分野」は詩学を指す。この二つが区別されることが「私が落ち着いて仕事が出る」ために必要だった、とバシュラルは振り返る。この「区別」される時期がいつからなのか、はっきりしたことは述べられていないが、科学とイメージが「対立」ではなく「区別された領域」であることをバシュラルは強調するようになるのである。

とはいえ芸術が孤独なものでありつづけるならば、科学と芸術が「対立」であっても「区別」であっても、バシュラルの詩学を社会から隔離したものであるという批判は変わらないだろう。すでに述べたように、科学の領域が他者との相互理解という社会と結びつく要素を持っているとするならば、芸術と科学が「対立」的な関係ではなく、むしろ「区別」であった方が、芸術が社会と隔絶する、というニュアンスはより強まるかもしれない。しかし科学と芸術を「区別された領域」と見なすことは、両者を関係ないものとみなすことではない。特に注目したいのは、バシュラルがラジオについて語る議論である。科学的な技術を使っているにもかかわらず、バシュラルはラジオを芸術の一つとしてとらえ、芸術同様、「孤独な」営みととらえていた⁽²⁷⁾。この議論が本論において意味を持つのは、ラジオが孤独であるならば社会にとって必要ない、という意見に対してバシュラルが次のように反論するからである。

「でも一体」とある人たちは言うだろう。「それは誰の役に立つのか」もちろん、それを必要としている人達に、である。(中略) ラジオは不幸な魂、暗鬱な魂に夜を告げてやらなければならない。「重要なのは、地上で眠ったりしないこと。キミが選ぼうとしている夜の世界に戻っていくことだ」(DR⁽²⁸⁾ 223)

これはラジオに関する論の最後に当たる部分であり、バシュラルはラジオが

一人孤独に楽しむ娯楽ならば実は必要ないのではないか、という指摘に反論する形で論を締めくくっている。彼によれば、ラジオが我々にとって必要なのは、逆説的ではあるがラジオが「孤独」であり、他者と全く関係しないからである。バシュラルはラジオを「夜の世界」に位置づける⁽²⁹⁾。それは眠る時間であり、休息する時間である。その時は、昼間のことを引きずるよりも、きっぱりと忘れることが求められる。その結果、よく眠ることが出来るならば、次の日、よりよく活動できるだろう。このように夜の世界は、むしろ関与しないことによって昼にとって重要となる。

このような活動と休息の関係は、実は初期のころからすでになされていた。バシュラルは時間を論じた初期の議論で次のように述べている。

生きられる、活動的で創造な持続のまさにその中に、根本的な異質性が存在し、時間を十分に認識して活用するためには、創造と破壊のリズム、制作と休息のリズムをうまく働かせなければならないことがわかるだろう。ただ怠惰だけでは、同質的である。それを繰り返し征服することによって初めて、それを守ることができ、繰り返し獲得することによって初めて、それを保つことができる (DD⁽³⁰⁾ 8-9)

バシュラルはベルクソンを批判して、時間の本質を瞬間であると主張する。それは瞬間という孤立した一瞬をつなぎ合わせることで、時間の創造性を論じることが出来るからである⁽³¹⁾。そしてバシュラルはその瞬間が、互いに「異質」なものであることを強調する。同じ瞬間が連続してもそこに創造性はない。創造と破壊、活動と休息という正反対の瞬間が隣接するときこそ、時間は互いに活性化する。休息だけでは「怠惰」となるが、活動だけでは「それを守ること」はできない。

このように考えるならば、孤独な芸術と他者との理解が求められる科学の活動の関係に、別の側面が浮かび上がってくる。すなわちそれぞれが異なり、はっきりと区分されることによって、両者が関与しないのではなく、逆に発展していくような関係である。またそのように考えるならば、振り返ってバシュラルの詩学が社会から隔絶したものにとらえられていることにも、新たな光が当たる。確かに芸術は社会と隔絶する。むしろ積極的に隔絶しなければならないだろう。しかしそれは芸術が他者と全く関係がないということを意味しない。夜に幻想の世界を孤独に楽しむこと、ゆっくりと一人休息することが、昼に他者と理解し合うための活力となるからである。この昼の活動によって、社会は実際に変化し、我々は現実「貢献」することが可能となる。このような芸術と社会の関係をバシュラルが理想としていたとするならば、それはサルトルのアンガージュマンのように積極的な社会参画を促す芸術論とは異なるかもしれないが、別の意味で芸術

が社会に益する方法を指摘する議論なのではないだろうか。

結語

本稿では、ガストン・バシュラルの芸術論における社会「貢献」の議論を、同時代のサルトルとの比較を通して明らかにした。バシュラルの芸術論はそれを楽しむ人間の「孤独」を強調する点において、社会への「貢献」を重視したサルトルの議論と対照的である。しかし芸術は孤独でありながらも、2つの点において、社会への芸術の貢献の可能性を指摘している。第一は、イメージによる現実の改変の可能性である。例えば夜の騒音を海のイメージを伴って知覚することで我々の現実の捉え方が変わる様に、イメージは我々の知覚を変化させる力を持っている。これを効果的に使うことで我々は芸術から一定の利益を得ることが出来、ひいては社会に貢献できる、という論点である。第二は、芸術がもつ孤独な性質が、逆に社会に寄与する可能性である。芸術は休息の時間と位置付けられ、むしろ社会を忘れることが求められる。しかし休息したことで得られた活力は、社会を変えていくことに貢献する。サルトルに代表されるようなこれまでの議論では、芸術がしばしば現実と異なる世界を描き、結果として社会の問題を放置することにつながる事が批判されていた。しかしバシュラルは芸術が現実とは異なる世界を作り出すということを認めながらも、逆にそれ故に社会へと寄与する可能性を指摘する。もちろん、この効果は間接的なものにとどまるかもしれず、必ずしも上手くいくとは限らないだろう。しかし、直接に現実を描く以外の芸術作品においても、社会に貢献できる可能性を示した点において、興味深い視点を提示しているのではないだろうか。

- (1) ただしいくつかの論では、バシュラルの詩学が必ずしも社会と隔絶したものではないことは指摘されている。例えば、Kaplanはバシュラルがブーバーに寄せた賛辞を手掛かりに、バシュラルの詩学における創造と現実の交錯を「反響 (résonances)」という概念を使いつつ論じている。("Imagination and Ethics: Gaston Bachelard and Martin Buber" *International Studies in Philosophy*, 35 : 1, 2003, pp75-88)
- (2) Gaston Bachelard, *La psychanalyse du feu*, Gallimard, 2002 (1938^{1re}) (『火の精神分析』前田耕作訳、せりか書房、一九九九年 (一九七四年初版))。以下、PFと略す。
- (3) 詩という芸術の一ジャンルが芸術全体を代表するというバシュラルの考えは彼の詩学概念を反映しており、第2節でみるようにサルトルと対照的である。
- (4) ここで「客観化」と「主観性」、という言葉遣いがされていることに注意したい。客観はそれに到達する努力をして徐々に達成されていくのに対し、主観は人間の自然な認識と結びついているというバシュラルの考えがここから読み取れる。
- (5) Gaston Bachelard, *La flamme d'une chandelle*, P.U.F., 1996 (1961^{1re}) (『蠟燭の焰』洪沢孝輔訳、現代思想社、一九九三年 (一九六六年初版))。以下、FCと略す。

- (6) Gaston Bachelard, *Le rationalisme appliqué*, P.U.F., 1949. 以下、RAと略す。
- (7) ただしバシュラールが自らの詩学を現象学と関連付けたのは、1957年の『空間の詩学』以降であり、それまではフロイト、ユングらの精神分析理論を多く参照していた。バシュラールのこの転換にメルロ＝ポンティと並んでサルトルの影響を読みとることが出来る点については拙稿（「ガストン・バシュラールの現象学に依拠した芸術論——科学哲学との関係から——」、美学会編発行『美学』、62巻1号（238号）、2011年6月、13-24頁）を参照のこと。
- (8) Jean-Paul Sartre, *Qu'est-ce que la littérature?*, Gallimard, 1948. 以下、Qと略す。
- (9) ただし、悪い画家は「一軒の」あばら家ではなく、「典型的な」あばら家を描く。この「典型的な」あばら家は、「一軒の」あばら家よりも概念的であり、より記号に近い存在と言えるだろう。その点では、一つの「もの」として事物を描き出せるかどうかは、媒体によって自動的に決定されるわけではなく、絵画の質にも左右される。
- (10) 散文と詩のこの区別については、シクロフスキーが同様の主張を行ったことで有名であるが、サルトル自身はヴァレリーの名を挙げている。「散文は第一に、一つの精神的な態度である。ヴァレリー流に言えば、陽光がガラスを横切る様に我々の視線が言葉を横切るとき、散文がある」（Q 26）
- (11) Gaston Bachelard, *La poétique de la rêverie*, P.U.F., 1960（及川かおる訳、『夢想の詩学』、ちくま学芸文庫、二〇〇四年）。以下、PRと略す。
- (12) もっともこの区別は明確にすることが難しい場合も存在する。とはいえバシュラールは「夜の夢から夢見る主体への移行（PR 126）」は、「区分する境界線を引くことは困難である（PR 127）」としながらも、「境界は実際に存在している（Ibid.）」と見なす。
- (13) さらに指摘するならば、家の絵をみて夢にふける人とも区別は存在しない。一方、サルトルにおいては、それぞれは異なっている。自分が思い出せない家を思い出すときに絵画を手掛かりとするという場合、その家は、純粹に頭の中で思い描く場合と同じように、実際にはそこに存在しない。その点で絵画はイメージであると言えるが、ただしその素材を知覚から借りている点で、脳内で作り出したイメージとは異なる。
- (14) Jean-Paul Sartre, *L'imaginaire*, Paris, Gallimard, 1940. 以下、Iと略す。
- (15) この知覚とイメージの区別は、フッサールを継承している。バシュラールは1957年の空間の詩学（*La poétique de l'espace*, P.U.F., 1957）において、現象学に依拠して文学を論じると主張するようになるが、イメージに関する主張を変えることはなかった。その点では、サルトルの方がフッサール現象学を正當に引き継いだといえるだろう。
- (16) 例えばサルトルは次のように言う。「想像的なものを好むということは、イメージのなかの富、美、豪奢をその非現実的性質にもかかわらず現存する平凡さよりも好む、ということだけではない。それはまた、『想像にかかわる』感情や行為を、それが想像的な性質を持っているために選ぶ、ということなのだ。単にあるイメージを選ぶ、ということのみならず、想像的狀態を、その狀態に伴う一切の物事とともに選ぶことであり、（中略）現実的性質、現実界が我々に要求する反作用の様式、行為の対象への従属性（中略）、それら全てから逃避することである」（I 189）。
- (17) ただし、知覚とイメージ違いについて、サルトルは徐々に言及しなくなる。これまでの研究の中には、この過程でバシュラールが果たした役割について着目するものも存在する。例えば Pierre Rodrigo, « Sartre et Bachelard. Variations autour de l'imagination matérielle » in *Cahiers Gaston Bachelard*, N° 8, Université de Bourgogne, 2006, pp.45-55.を参照のこと。
- (18) 現実の事物を知覚することと、現実の事物を知覚しつつ夢想することにほとんど違いが存在しないのは、我々の知覚が常にイメージに付きまとわれ、それを排除することが難しいからである。バシュラールはイメージを排除した知覚として科学を想定していたが、科学

においても簡単に真理に到達することが難しいように、イメージを完全に排除することは極めて困難であるとする。ただし、そこには程度の差は存在し、バシュラールは芸術におけるイメージを「現実と夢の中間世界」(*La poétique de la rêverie*, P.U.F., 1960 (及川かおる訳、『夢の詩学』、ちくま学芸文庫、二〇〇四年), p145)、すなわち実際の観察と、知覚を伴わないイメージの中間点に置いていた。

- (19) それどころか、イメージは現実の本質を表すものとされる。この点については、拙稿 (「ガストン・バシュラールの物質的想像力——イヴ・クライン《空虚 (le Vide)》展を手がかりに——」、東京大学美学芸術学研究室紀要『美学芸術学研究』、34号、2016年3月、1-19頁) を参照のこと。
- (20) この違いに関して、少なくともサルトルは自覚的であった。例えばサルトルは『存在と無』においてバシュラールについて大きく2か所批判をしているが、その一つは次のようなものだからである。「この著作 (『水と夢』) のうちには大きな将来性がある。特に「物質的想像力」の発見は、確かに発見の名に値する。しかし実をいうと、想像力という用語は、我々には適当とは思われない。また諸事物とその素材、ゼラチン状、個体状、流動状などの背後に、我々がそこに投影するだろうイメージを探り求めようとするこの試みも、やはり適当とは思われない。我々が他のところで示したように、知覚は想像力と共通のものを何も持たない。逆に、知覚は厳密に想像力を排除するものであり、想像力もまた厳密に知覚を排除する」(Jean-Paul Sartre, *L'être et le néant*, Gallimard, 1943, p.661)。ここでサルトルが指摘するバシュラールの問題点は、諸事物にイメージを投影しようとする態度、すなわち知覚と想像力の混同にある。この批判に対してバシュラールは対応することはなかったが、それは、すでに述べたようにバシュラールにとって通常知覚がイメージを伴っていることは、彼の芸術論の根本を支える、変更不可能な主張であったことに起因するだろう。
- (21) Gaston Bachelard, *La poétique de l'espace*, P.U.F., 1957 (岩村行雄訳、『空間の詩学』、ちくま学芸文庫、一九六九年)。以下、PEと略す。
- (22) 例えばバシュラールはこの事態を次のように言う。「私は世界を夢想する。従って世界は私が夢想するように存在する」(PR 136)。
- (23) このような事例は特殊であり、我々が通常もつイメージとは異なっているという指摘もあり得るだろう。とはいえ、すでに述べたようにバシュラールにとって、イメージが知覚に働きかけることは通常の知覚においてもなされることであった。なぜなら、騒音を海の音と見なすといった大きな変化のみならず、価値変化をも含めているからである。例えば、我々が家を見た時に、そこに自らの生家を思い出すと言った事例がそれに当てはまる。その時、その家は実際よりも安らげる場所であるように思われるならば、それはイメージによる現実の改変と言ってよく、さらにバシュラールは我々がほぼすべての知覚においてこのようなイメージの影響を受けているとみなす。
- (24) このような芸術の「貢献」の指摘は、バシュラールが当初は精神分析理論を参照しながらイメージを議論していたことも影響しているだろう。すなわち芸術が「現実に与える「安らかさ」の効果は、芸術による精神療法にも通じるからである。
- (25) この主張をバシュラールは初期のころから行っていたが、のちに現象学を参照する原因の一つにもなっている。
- (26) Gaston Bachelard, *Fragments d'une Poétique du Feu*, P.U.F., 1961 (本間邦雄訳、『火の詩学』、せりか書房、一九九〇年)。以下、FPFと略す。
- (27) バシュラールとラジオの関連については、拙稿 (「ガストン・バシュラールとラジオ」、東京大学美学芸術学研究室紀要『美学芸術学研究』39号、2021年3月、1-19頁) を参照のこと。
- (28) Gaston Bachelard, *Le droit de rêver*, P.U.F., 2001 (1970^{1re}) (『夢見る権利』 渋沢孝輔訳、筑

摩書房、一九九九年（一九八七年初版）。以下、DRと略す。ラジオに関しては、論文“Rêverie et radio”で議論されている。

- (29) ラジオ、ひいては芸術を「夜」のものと位置付けるのは、バシュラールの詩学が精神分析理論から強い影響を受けているからである。
- (30) Gaston Bachelard, *La dialectique de la durée*, Boivin, 1936 (掛下栄一郎訳、『持続の弁証法』、国文社、一九七六年)。以下、DDと略す。
- (31) バシュラールはこのような瞬間に関しても「孤独」とであると指摘する。(II 13)